

になりますから、手まりうた一つ二つお目
にかけます、面白くはおりませんが、どう
ぞ、うたつて見て下さい、そして、わるい
所は直して下さい。

埼玉 桑田良隆

我が少女等（あの山に光るもの）

日の本の、うまし御國に、生れあひたる、少女等
はく。

師と親の、をしへ受けて、禮儀作法を、ただしく
し。

読み書きの、みちも覺て、ともに賢き、母とな
れ。

君のため、國の爲なり、はげめ少女等、たゆみな
く。

孟母三遷

十八

支那に名高き孟子の母は、世にも稀なる賢き人よ、
寺の近所や市場に居ては、かわい我が子か毎日ひ
にち、佛事うりかひ夫れ等の遊び、ためにならず
と學校のそばへ、家を移して住むし程に、子供な
がらも夫より後は、禮儀作法や読み書く事の、ま
ねをしながら、終日遊ぶ、母はやうく安堵の思
ひ、かくも常々心をこめて、そだてたまひし其の
かひありて、終に孟子は大賢人と、世々につたへ
て朽ちせぬはまれ、夫といふのも皆平生の、母の
教の正しき故よ、これぞ世にいふ三遷の教なる。

いそぶの話

狐と豹

狐と豹と行き遭つて、何方が美しいかといふので

甚く議論しました、處が、豹は、自分の皮について居るいろ／＼の斑紋を一々狐に見せて、「どうだ奇麗だらう」といひますと、狐は澄し込んで「然し、僕は身體にはそんな紋様がない代りに、チャンと心に裝飾がある、だから、君より、餘程、美しいと思ふ」といひました。

獅子と兎

或時、兎が心地よく寢て居ると、大きな獅子がやつてきて、いきなり捕へて食べようとした。處がそこへ丁度、一匹の牡鹿がやつて來たので、獅子は、眼つてる兎を捨て、置いて、すぐ鹿を追つかけました。兎は其音に目を覺まして、「オー危いことだつた」といつて逃げて行きました。すると獅子は、どうしても、鹿に追ひつくことができなかったから、又元の處へもどつて、兎の御馳走にな

らうと思ひました。けども、兎はもう居りませんでした。そこで、獅子は「あゝ、これは不甘いことをした。餘計に取らうと思つた許りに、己の手に入つて居たもので逃がして仕舞つた」と申しました。

獅子と熊と狐

或時山の中で獅子と熊とが一匹の山羊を取り合ひして、激しく争つた末、二匹とも甚く怪俄をして、とう／＼其場へ倒れて動けない位になりました。すると、一匹の狐が遠くに居て、さき程から、何度も行つたり來たりして見て居ましたが、二人とも全く疲れて倒れたのを見極めて、いきなりやつて來て、中央になつた山羊を嚙へて走つて行きました。獅子と熊とは夫を見ながら、追つかけることも出來ませんで「何んのこつた馬鹿／＼しい

丸で狐に御馳走してやる爲めに、二人で散々争うて、骨折つたやうなもんじやないか」といひました。よく、一人の人が骨折つたものを、丸で、他の人に取りられて仕舞ふことがあるものです。

狐と農夫

いつもいつも、狐がやつて來ては飼つてゐる鶏を捕つて行くので、或時のこと、とう／＼係蹄をかけた、其狐を生擒りました。そこで、餘り悪いから、存分ひどい目に遇せてやらうといふので、其尻尾に、糞を一束結び付け、夫に油をかけて、火を燃やしました。すると、狐は死者狂ひになつて驅け廻はつて、やがて、其農夫の裏の畑に飛び込みました、丁度其時は、麥の時分でしたから、堪りません、畑中一面火になつて仕舞つて、可愛相に、其年は、丸で、麥を取ることが出来ませんでしたと

さ。

盜賊と鶏

或晩、二三人の盜賊が他の家へ這入りましたが、何も取るものがなくつて、たつた牡鶏一羽を盗んで行きました。さて、棲家へ歸つてから、夫を殺さうとしますと、其牡鶏が申しまするには「どうか、命丈は助けて下さい、私は、大層人間様の爲めになる鳥です、即ち、夜分、仕事をさせる爲に人間の目を覺させるので」とすると、盗人等は「夫だから尙更殺すのだ、なぜかといふと、お前が鳴いて家の人の目を覺させるといふと、全く己らの仕事が出来ないもの」といひました、善人の味方は屹度惡人に憎まれます。

考へ物